

戸川幸夫動物文学全集
12

講談社



戸川幸夫動物文学全集12 虎への探求ほか

昭和五十二年七月十八日 第一刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二一 郵便番号一二二
電話東京(〇三)九四五一一二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 一九〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

©戸川幸夫 一九七七年 Printed in Japan

目次

狼の軌跡	5	胡獐海流	67	氷海の挽歌	89
折れ牙	113	非情	127	象を撃つ	141
白眼がどこかで笑ってる	162	肥後の勘小父伝	180		
ジャック・ロンドンの道	198	勇氣	222	コマ	243
シートンと狼たち	264	虎への探求	293		
解説・尾崎秀樹	332				

狼の軌跡

狼の軌跡

一

電子の粒子が空間に飛び散って、一つの軌跡を描きだすように、人の心の中にも何かわからないが、一種の素粒子のようなものがあつて、それがあつた時機に行動を起こして、運動を始め、あるときは衰弱して消滅するが、ある時はだんだんと発達して、活潑な軌跡をつくり上げてゆくのではなからうかと、ときどき僕は考えることがある。

僕の心の中で、芽をふき、年齢と共に発達して複雑な軌跡を形成してきたものに、狼への追跡がある。そして、その軌跡の出発点をたどってみると、それは僕の幼年時代の奈良三笠山での思い出につき当たるようであつた。

それは大正の五、六年ごろだつたと思う。僕がまだ幼稚園に通つていた時だつたからで、両親や祖母と一しょに撮つた記念写真がいまもなおちゃんと僕のアルバムに残っているから、これははつきりしている。

僕たちは嫩草山の下で写真を撮つた。母は私に、この山は柔い草が生えているから、頂上からごろごろ転んでも怪我はせんそうよ、と言つた。ふしぎそうに見上げている僕に案内人は、

「坊っちゃん、この奥の三笠山の山続きには狼が棲んでいましてな、鹿を捕えて食べていますよ」

と話してくれた。祖母は佐賀弁まる出で、

「怖かのオ」

と眉をひそめた。僕は狼はどんな姿をしているか見たいもんだ、と思つた。奈良についての当時の記憶はこれしか残っていない。だが、三笠山での記憶は、はつきりしていて山の端に羊の毛をまるめたような白い雲が浮かんでいたことまで憶えている。よほど狼の話が強く心に響いたからだろう。

そのあとイソップの物語やグリムやアンデルセンなどの童話で、なんども狼に接した。小学校に上がつてからは修身で、嘘つきの子供を食べた狼の話も聞いた。だが、そこに出てくる狼たちには体温が感じられなかつたから僕に軌跡を描かせるほどの起爆力はなかつたようだ。

九州から僕の一家が東京に引っ越してきた年の次の年、つまり大正十二年は関東大震災が起つた年でもあつたが、僕は大病をして、約一年間を病床についていた。そのころ僕の家には居た叔母が僕を慰めるためにある日、本を買ってきてくれた。叔母は僕が動物好きなのを知っていたか

ら、表紙に牙をむいた狼が描かれている本を、中身をよく調べもせずに買ってきてくれたのだった。

その本が、ジャック・ロンドンの「白^{ホワイト}牙^{フランク}」だったことを、僕はずっと後になってから知ったが、小学五年生の僕には、ロンドンの文学は難しくて理解しにくかった。

「白牙」は、だから、そのまま枕もとに置かれたままになつていた。叔母は、それを見るたびに悲しそうな顔をして、

「ほんとによう調べてから買^かうてくりやあよかった。こりやあ、少し難しかとじゃネー」

とくり返した。

次に僕が手にしたのはキプリングの「ジャングル・ブック」だった。狼たちに育てられたモーグリ少年の冒険物語にわくわくしたものだ。しかしアーネスト・シートンの「動物記」に到達するまでには、まだかなり間があった。キプリングからシートンまでの間に立川文庫の猿飛佐助や三好清海入道や、孫悟空などが介在し、僕は夢中になつてそれに傾いていた。

僕の狼への軌跡は遅々として前進しなかったが、三笠山を起点として確実に鼓動していたことだけは確かだった。僕がはじめてシートンに接したのは、はっきりした記憶はないが、中学校の上級生になった頃ではないかと思つてゐる。

シートン全集の中で、何といつても傑作は「カランボー

の王様、狼王ロボー」の物語だろうが、シートンは悪役としての狼への誤解を僕からきれいに拭^{ぬぐ}い去つてくれた。ロボーがその愛する妻を囹^{おとろ}にされて、救おうとして罌^やにかかると。妻も死に、仲間も助けに来てくれぬと知つて覚悟を決める情景。最後は泰然として死んでゆく結末は僕をひどく感動させた。

「私はロボーの傍に水と肉を置いてやつたが、彼はそれを振り向いても見なかった。静かに横たわつたまま、じいっと力のこもつた黄色い眼で、私の肩を越えて峡谷^{キャニオン}の門口から広く開けた平原を——彼が多年にわたつて領していた平原を見下ろして、私が手をふれても筋肉一つ動かさなかった。日が落ちて、彼はまだじいっと高原を見わたしたままであった。私は夜に入ったら彼が一堂の者を召集するだろうと期待して、その用意をしていた。けれどもロボーはただ一度叫んだだけだった。誰も来なかった。彼は二度と再び叫ぼうとはしなかった。

(中略)翌朝、夜が明けてみると、ロボーはやはりおだやかな休息の姿勢のまま横たわつていた。その肉体は傷つけられてはいなかった。だが、魂はもはやもぬけの殻となつていた——老王狼は死んでいたのである」(評論社版、内山賢次氏訳)

僕は続いてジャック・ロンドンの「野生の呼び声」や「白牙」を求めて、くり返しくり返し熟読した。僕の狼に対する憧憬^{どうけい}の素粒子はこんどははっきりした形で少しずつ

動き出したのである。

僕がはじめて、活字から離れた狼の体温を感じたのは、旧制高等学校の生徒になってからであった。僕は昭和七年に山形高校の理科に入学したのだが、その年の野外演習のときだったと思う。山形市小白川の学校を出発して龍山から蔵王と、山岳地帯を行軍し、蔵王温泉に一泊して帰校するというのが予程になっていた。龍山の山腹にある小さな沼の傍で昼食を食べていると退役中尉の皆川という軍事教官が、この山には狼が生息していると言いつ出した。龍山は蔵王山塊の出城（でじょう）でも言うべき山で、そう高くはないが峻（げん）峻（げん）な山であった。話してくれた教官は土地の人で、この辺りの事情にくわしいので、話に真実味があつた。

動物学者を志望していた僕は、かねてから興味をもっていた山犬（ニホンオオカミ）について平岩米吉氏や斎藤弘吉氏らの論文などによつて自分なりに勉強していたつもりであつた。斎藤さんが発表したニホンオオカミの頭蓋骨の測定値などをノートに書きうつして、データとして暗記などしていた。だから皆川教官の話は僕を大いに刺戟（しげき）した。話によると、狼たちの行動は非常に敏捷で、向こうの峰で吠えているかと思うといつの間にか村にやってきていて、旋風（かぜ）のように荒らし、鶏や兎などを攫（さら）って去ってゆく。まったく神出鬼没で、決してワンワンなど犬のような吠え方はない。尾も捲かず這（は）うようにして走る——というのだ。話の様子では、たしかにニホンオオカミのようである。し

かし、学会で確認されているところでは、ニホンオオカミは明治三十八年の一月に奈良県吉野郡小川村鷲家口で猟師に射殺された若い牡鹿が最後のものとされている。この狼は、米人アンダーソンによつて買い上げられ、大英博物館に納められたが、その後、ニホンオオカミと学問的に確認されたものは一頭も捕えられていないので、ニホンオオカミは三十八年ごろに絶滅したとみられていた。

僕が大同の五、六年ごろに奈良の三笠山で狼の話聞いたころは、或いはまだ残存していたかもしれない。なぜなら明治三十八年から十一、二年ほどしか経っていないから、奥山で人眼に触れずに生活しているのが居たとしても不思議はないからである。

しかし、昭和七、八年ともなると違う。

だが、僕は若者らしい功名心に燃えた。もしも皆川教官が言う山犬が、本当のニホンオオカミだとしたら、この発見は日本の動物学界の定説を覆すものになるに違いない——と考えた。行軍のあと、僕は何度も山犬が出没するといわれる村落に出かけていつて、村民の家に泊めてもらったり、罠をかけたり、猟師に捕獲を依頼したりしたが、捕えることはおろか、姿すら見ることはできなかった。

このころ山犬が出没して、農村を荒らしたり、村民に咬（か）みついたといった話は方々に発生していた。県や市町村でも放っておけず山犬狩りを随時に行っていた。あるとき米沢に近い万世村で一頭の山犬が射殺されたという新聞の

ニュースを見て、土曜日になるのを待つて出かけていった。しかし、役場に着いてみるともうその死体は焼却されていた。がっかりしたが、僕は死体を始末した係の人に会っているいろと訊ねた。

「小さい奴だったよ。白と黒の斑の毛でなあ……」

真正の狼に白黒斑毛というのは居ない。だからこれは言うまでもなく狼ではなくて、野生犬であるということを証明したものであった。だから龍山に出没する山犬の群れも、或いはこういった野生犬の集合体ではなからうかという疑惑が湧いた。だが、僕の山形県下に於けるニホンオオカミ追跡はそれで終わったわけではなかった。

またあるときは、米沢市内に山犬を現在飼っている人がいる、という話を聞いた。もちろん僕は出かけていった。山犬は檻の中に入れられていた。僕は一目で、それが僕が求めているニホンオオカミでないことを知った。

飼主は数年前に吾妻山中に伐木に行ったとき、溪流に流されてきた仔犬を拾って育てたものだ、と言った。性質は荒くて、家の者にも馴れない。これを扱える者は自分だけだ、と言い、野生犬の仔であることは間違いないと思うが、狼なんかではない、と正直に告げた。たしかに不思議な犬であった。背中が黒く、四肢や腹部は黄褐色だった。

顔の形や耳立ちは日本犬だったが、体型はむしろシェパードに似ていた。体毛は幾分ちぢれていて、尾は差し尾といふびんと伸ばした尾で、牙はふつうの犬よりも長大で、特

に眼は鋭く光って琥珀色であった。

ニホンオオカミではなかったが、野生犬であるということに僕は興味を覚え、外に連れ出せるか、と言った。その犬の歩く姿勢が見たかった。飼主は米沢で、

「あまい（いいだろう）」

と言った。それから、本当は、危険なので深夜か、早朝の人通りの少ないときに郊外を散歩させるのだが……と話し、写真を撮るのは構わないが、危ないから離れてついてきてくれ、と注文した。たしかにその犬は家人には少しも馴れていず、飼主だけにわずかに尾を振った。

次の日曜日に訪ねてゆくと一家中が留守で、その犬だけが檻の中に寝そべっていた。僕は、この日は一日ゆっくりするつもりで握り飯を持参していたので、朝から夕方まで犬の檻の前に坐り込んで、犬に話しかけたり、握り飯を分けてやつたりして遊んだ。咬まれるかな……と多少の不安はあったが、別れぎわに僕は右手の掌に唾液をつけて檻の中に差し込んだ。犬は匂いを嗅ぎ、それから優しく舐めた。馴れた！と僕は嬉しくなった。犬はひとりはつちにされて淋しかったに違いない。そこで、彼は野獸的な鋭い直感で、僕を友人と見きわめたに違いない。

三度目、飼主の家を訪ねると、飼主はその犬を座敷の中に放して遊んでいた。家の者はいなかった。戸を開けて、僕は入った。すると犬はさつと攻撃の姿勢で突進してきた。飼主が慌てて叫んだ。

僕は進みよる犬の前に、あぐらをかいて、

「俺だよ、忘れたかい」

と両手を拡げると、犬は飛びついてきた。だが攻撃の牙を揮うためでなく、激しく尾を振りながら僕に抱きついて、顔じゅうを舐めまわした。

「しええーッ！」

という声を飼主は出して、

「なして、あんたに馴れたんかなア……。いやまず、愕い

たあ……」

としきりと首を振った。

その後、山形市内にむかし狼を飼ったことのある老人が居るといので、話を聞きに訪ねたこともある。老人は、あれは明治十七、八年ごろだったかなあ……と言った。そのころなら山岳の多い山形県下にはニホンオオカミが居たに違いない。僕は身を入れて拝聴したが、老人の話はまったくのでたらめであった。

そのころニホンオオカミに関する本はまったく無かった。だが日本犬や狼の研究者である斎藤弘吉氏が日本犬保存会機関誌「日本犬」などに掲載される研究論文は僕の狼に対する情熱を激しく掻き立てた。斎藤さんは自分の足で全国の山村を歩きまわって調査したところを書かれただけに、僕は惹かれた。僕はその論文をスクラップ帳に貼って勉強した。

僕の狼の軌跡は氏によって大きくふくらまされていった

といつてよい。氏はあるとき、こう述べた。

「日本に棲む（棲んだというほうが正しいが）オオカミには二種類あつて、一つは北海道にいたシベリア系の大型のものである。これはエゾオオカミと呼ばれ、同地の牧畜に大害を与えたので、懸賞金つきで捕獲され、明治二十二年ごろ絶滅した（明治三十七、八年ごろ北海道の山奥の雪の上を一、二頭が彷徨しているのを見たという報告があるが、確認されていない）。

いま一つは本州、四国、九州に産したオオカミ——いわゆるヤマイヌであつて、小型で、足が短いのが特徴とされ、大陸系のオオカミ（*Canis Lupus*）の亜種としてニホンオオカミ（*Canis Lupus Hodophylax Temminck*）と呼ばれている。講談や落語に顔を出すオオカミというのはこれである。

尤も昔の人はニホンオオカミも、野生化した犬も、狂犬病になった病犬も区別なしにひっくるめてヤマイヌと呼んでいたので混同されて来たが、正確にいえば、日本人が言うヤマイヌまたはオオカミとはニホンオオカミのことを指すのである。シーボルト氏によって採集され、テミンク氏らによって記述された「日本動物誌」（*Fauna Japonica* 1829—1847）には、

『日本人の言うヤマイヌは形態といい、食物といい、まったくわれわれの国のオオカミに比すべきものである。しかし足が短い点で（中略）十分区別がつく。ヨーロッパ

バのものとは概念を異にすることができる。同時にこの種は北米系の野生犬に属するとも考えられない。この足の短いという点は明らかにこの新種の特徴である』と記されている。ニホンオオカミの餌は鹿、猪、兎、

狐、蛇、蛙、小鳥、昆虫、野鼠類だったから、農村にとつては害獣というよりも益獣の方に入っていた。だからニホンオオカミは御岳神社（東京）、三峯神社（埼玉）、山住神社（静岡）をはじめ、各地多数の神社のお使姫、または神に祭られて田畑の守り神にされている。『嚶々筆語』に、

『猪、鹿の多く出て田穀をそこなふとき、彼神（大川神社——京都）に曰して、日数を限りて狼を貸し賜らんことを祈撃めば、狼すみやかにその郷の山に來入居り、猪、鹿を退治むとぞ』

とある。狼の語源は大神から出たもので、『万葉集』第八卷の舎人娘子の歌に、

大口の真神の原に降る雪は

いたくな降りそ家もあらなくに

とあるが『大口の真神』とは大きな口の神様という意味で、これはつまり狼を指している。そして大口の真神が縮まって大神となり、狼の意味であると言われている。大口の真神の原というのは現在の奈良県高市郡飛鳥村である。

ニホンオオカミは明治三十七、八年ころまではだいたい日本全国に散らばっていたらしいが、中でも山形、関東一帯、奈良付近は特に多かった。今から六百年ほど前の元弘

三年五月十五日、府中の分倍河原の合戦で、新田義貞の家臣が重傷を負って苦しんでいると狼が襲ってきたが、近所の農民が救助したという話が残っている。奥多摩地方にはニホンオオカミに関する伝説も多い。

実際に狼は田畑を荒らす害獣たちを餌食として駆除してくれたので、農民たちからは感謝されていた。昔の日本人は動物質の食糧は殆ど魚貝類に頼っており、牧畜もしなかったから狼と利害がぶつかることがなかった。人間は狼を神様または神のお使姫として畏敬していたし、狼も人間を害のない動物だとして抵抗しなかった。『煙霞綺談』に、

『山家の人は常に見馴れしゆゑさのみ恐れず、こなたより手を出さざれば人を咬むものにあらずと言へども、またま道に行き逢ふときはいかげんと立ち止るに、彼は少しも止まらず、まことに人なきところを行くがごとく、のそのそと歩みる。せんかたなくて道を除け、見ぬ態にて通れば悠々と志したる方へ、後も見返らず行く』

とあり、当時の狼と人間との関係を知ることができて面白い。しかし、狼の害が皆無だったわけではなく、馬の産地である奥羽地方ではやはり狼害に悩まされていた。また享保十七年、寛保二年、安永年間、天明六年に狂犬病が飼犬の間で発生した。そのときは犬から狼へと伝染し、また狼から犬へとうつたりして最初のうちは畿内、南海、山陰、山陽、西海道、東海道だったのが、後には九州に渡り肥後、豊後、日向地方や、北は奥州路にまで拡大し、全国

的な大流行となった。『北窓瑣談』によると『病狼^{おびた}夥しく出で人を害せしに、不日に数十、百人傷をかうむりける』という有様だった。狂犬病の発生源はおそらく犬からであったろうが、犬が狼を咬み、狼が狼を咬み、また犬を咬みして流行したものであろう。ということはニホンオオカミは犬の居るような人里近くへ絶えず出没して家犬とも面つき合わせていたことが考えられる。狼の牙には毒があると昔の人が恐れたのも、狂犬病にかかった狼に咬まれた人が発病したからに違いない」

斎藤弘吉さんは山形県鶴岡の人であったが、僕が山形高校に在ったころは、もう東京に住んでいた。上野の東京美術学校を出て画家になろうと志^{こころざし}していたが、病になり、その療養中に日本の古美術を調べていて、日本犬のことを知った。そしてこの美しい日本犬がわが国から姿を消しつつあることを悲しんで、なんとかして保存しようとして、同好の人たちとはかり昭和三年に結成したのが日本犬保存会だった。凝り性の彼は日本犬を保存するだけでなく、日本犬がどこから来たのか？ 古代の日本人との結びつきはどうなっていたか、を探索するために考古学や古生物学にまで手をのばし、日本古代犬の研究にとりかかった。

すると、どうしても狼まで調べなければ満足できなくなった。こうして、彼のニホンオオカミ、エゾオオカミに関する研究が始められた。僕が彼のことを知った頃は、既に彼は日本犬やニホンオオカミ研究では第一人者とされてい

た。僕は斎藤さんが多数のニホンオオカミの頭骨を蒐集^{しゅうしゅう}していることを知り、訪ねてみたいと思った。だが、一生がいきなり訪ねたところで相手にされないうちに違いないと尻込みをした。それでもニホンオオカミの頭骨を一目見たという望みを抑えることはできなかった。そこで高等学校の二年のとき、夏休みで東京に帰った僕は上野の科学博物館に行った。ここには福島県下で獲れたニホンオオカミの剥製^{はくせい}が展示してあったので、僕は帰省の度に見に行っていたのだが、このときはふっと、剥製があるくらいだから、もしかしたらニホンオオカミの骨格があるのではなからうかと考えた。

僕は動物課の部屋を訪ねて、狼の骨が保存してあれば見せてほしい、と申し出た。僕に應對^{おうたい}したのは若い人であったから、或いは研究室の助手であったかもしれない。彼は面倒くさがりもせず、古い帳簿をひっぱり出して調べてくれた。

「ああ、ありますね、三体あります」

そう言うと、先に立って僕を骨格室につれていった。現在ではちゃんとした骨格標本室が出来て、展示されているが、そのころは骨はあまり重要視されていなかったのか、骨は骨格室に非公開で保存され、特別の研究者にだけ見せることになっていた。

狼の骨は部屋の一隅にあった戸棚のいちばん下の抽斗^{ひきだし}の中に、紙にくるまれて無造作に置いてあった。もちろん組

み立てられたものではなかった。そのうちの二休分の骨には産地を書いた紙が貼つてあつて、一つはシベリア産、いま一つは朝鮮産とあつた。ところが最後の一体だけには産地の明示がなく、単に山犬骨とだけあつた。

「これはどこの狼の骨でしょう？」

と僕は訊ねた。その人はノートを調べ、こちらにも書き込んでないから、判りませんねえ、と言つた。

「いつ頃の骨でしょう？」

僕は黄色くなつたばらばらの骨を見ながら質問した。

「さあ、いつ頃のか……かなり古いようですね」

「手にとつて調べてもいいですか？」

「かまわないでしょう」

僕はその場にしゃがみこんで頭蓋骨を取り上げた。頭骨に窓から射し込んだ陽があたつてぴかっと光つたように思へたことと、その部屋が埃っぽい部屋であつたことを記憶している。

僕はながいことかかつて、骨を一つ一つ調べた。係の人は少々うんざりした様子で部屋の中をぶらぶらしていたが、僕が骨を持ち去る人間ではないと見きわめをつけたのか、

「少し、調べかけてることがあるから、あんた、見終わつたら私のところへ知らせして下さい」

と言ひ残して出ていった。僕は斎藤さんのデータを写したノートを拵けて、その頭蓋骨と見くらべた。頭蓋基底

長、最大頭蓋長、下顎骨長、上顎口蓋の幅の割合、前頭骨の傾斜度、裂肉歯の大きさなどをノートと合わせてゆくと、僕には、どうしてもこれがニホンオオカミに違いないと思へてきた。

しかし、未だかつてニホンオオカミの頭骨を見たことのない僕には自信がなかった。そこで再び動物課を訪ねて、さきほどの人に、

「あれは多分、ニホンオオカミの骨だと思うけど、僕にはよくわからないから、一度、斎藤弘吉さんに見てもらつたらどうですか……」

と伝えた。その人にはやつと笑つて、

「そう……。じゃあ、こんど折があつたら見てもらいましょう」

僕は、そのうちニホンオオカミの骨格が発見されたという新聞記事が出るに違いないと、山形の学校に戻つてからも毎日、新聞に注意していたが、とうとうそのニュースを見ることはできなかった。一高校生の言つた言葉など専門家の彼は歯牙にかけなかつたのかもしれない。

ところが、この産地不明の狼の骨格は、僕が推定した通りニホンオオカミのものであつたのだ。そのことが、判明したのは、それから三年後の昭和十一年のことで、鑑定者はやはり斎藤弘吉さんであつた。斎藤さんはその遺著「日本の犬と狼」(雪華社版)の中で、その間の消息を次のように書いてゐる。

「科学博物館の動物課員百瀬文雄氏が来宅されて、明治二十三年引継ぎの際の書類によって倉庫内の骨類を整理したらヤマユと記した一体分の骨格を発見した。なにぶん産地不記のため、また小型狼は中国のもので、メキシコのもので、朝鮮のものでなんでもヤマユと書いた時代なので、ニホンオオカミではないかも知れぬが一度見てほしいとのこと。早速参上して計測してみると全くのニホンオオカミである。ごく若く、縫合等も完全に癒着してないが、歯はもちろん全部永久歯になっている。尾椎骨の一部や、胸骨等紛失している部分もあるが、ほとんど完全に近く保存されているし、破損もごく少ない。(中略)今日まで判明のものの中の最大のものより形は大きいことになる。鼓骨胞も上顎口蓋の各幅も、前頭骨の傾斜度等もみなニホンオオカミの特徴を具えている。とにかく一体分の発見はこんな嬉しいことはなかった」と。

博物館では貴重なる標本の発見に狂喜して、さっそく組み立てて展示することになった。ニホンオオカミの頭骨は狐つきの狐を落とすという迷信から、昔の農山村などでは、神棚に祀ったもので、従って各地にいくらか保存されているが、体の方は捨て去ったものらしく残っていない。おそらく、ニホンオオカミの全身骨格標本は世界でただ一つだろう。

このニホンオオカミの骨格標本の組み立てが完成して、展示されたのは十二年の秋であったが、面白いことにその

ニュースをスクープしたのは、その年に東京日日新聞(今の毎日新聞)社会部の記者となった僕であった。

自分が見つけたニホンオオカミの骨格が、目の目を浴びたことを、四年経ってから記事として書いたとき、僕は、僕と狼との間に眼に見えない糸が繋がっているように思えてならなかった。

二

この記事が契機となって、僕は市内版担当から引き上げられて大学や研究所を受け持つことになった。僕としては望むところだった。新聞の科学記者という肩書でどの研究所にも入ってゆけるからだ。名刺の価値というものが、こんなにまで大きいとは知らなかった。大学でも、研究所でも、博物館でも、動物園でも新聞記者の名刺を出すところを一人前の人間として扱ってくれたからである。

僕は、かねがね一度会ってみたいと思っていた斎藤さんを訪ねた。彼の家は世田谷中原の一角に建っていた。大根畑の中の道を歩いてゆくと、ちよつと小高くなった丘があつて樹が繁っていた。そこに茶室風のしつとりと落ちついた家が在った。

別に約束したわけでもなく、突然に思いついた訪問だったが、彼は名刺を見て快く通してくれた。

家の中を土間が通っていて濡縁のような縁側が張りめぐらされていたように思う。斎藤さんは奥の茶室のような、

あまり広くない部屋に坐つて、机の上にいっぱい動物の頭骨を並べて計測をしていた。

これがニホンオオカミの頭蓋骨だろうか？ と僕は眼を見ひらいた。二、三十はあるだろう。

僕は、狼の話を伺いに来ましたが、と言った。斎藤さんは大きな眼玉をぎょろりと動かして、静かな声で、「どうぞ」

と言った。どうぞと言われても、僕には彼に質問するよくな心の準備はまったくなかった。そこで、三笠山の話から始めた。ひと通り話してから、

「大正五、六年ごろというと、奈良あたりにはニホンオオカミは残存していたかもしれないでしょう？」

とたずねた。斎藤さんは微笑して、

「いたかも知れませんね。あるいは、もう居なくなつていたかもしれません。そこに恐ろしいものがいたという噂は、そのものがいなくなった後まで続くものですし、居ないというより、居るというふうに考えたいのが人情ですからね。」

しかし、居るという証拠は努力すればつかめますが、居ないという証拠はなかなかつかめません。

これを御覧なさい」

斎藤さんは、机の抽斗から一枚の狼の写真を取り出して僕に手渡した。その狼は死んでいて、店先にぶら下げられていた。牙の先が無念そうにまくれ上がった唇から白くの

ぞいていた。

「この狼は？」

「明治四十一年二月一日、時事新報社発行の『少年』という雑誌第五十三号に掲載された写真の複写ですがね。大台ヶ原山の杉谷間というところで射殺された狼だそうで、両国のもんじ屋小出松之助の店頭にぶら下げられていたのを、雑誌社のカメラマンが写したのですね。この写真の狼が本当にニホンオオカミかどうかを鑑定してくれと頼まれたのです」

「ニホンオオカミにしては少し痩せすぎではないはしませんか？ 外国の狼のようだが……」

「痩せてみえるのは殺されてから何日も経つてゐるからでしょうね。問題はニホンオオカミか、野犬かということですよ」

「明治四十一年といえばニホンオオカミが絶滅したといわれる三十八年から三年目です。」

これがもしもニホンオオカミだと立証されれば、ニホンオオカミの絶滅の年が三年遅くなるわけですね」

「そうなるわけです。しかし、この写真だけではわかりませんよ。頭骨でも残っていて計測でもできれば別ですがね……」

哺乳動物学会でも、専門家の間で回覧したが結論は出ませんでした」

「しかし、大台ヶ原山と明示してあったとすればニホンオ